

■大田垣蓮月 歌人、陶芸家。家族が次々と死去して出家、偶然出会った陶芸で人生開き、維新の志士から敬愛された。

おおたがきれんげつ
混浴禁止・・・1791＝

京都で、津藩主藤堂家の分家で伊賀国上野の城代家老藤堂良聖の庶子に生まれる。俗名は誠。_出生直後に、この年に知恩院門跡の坊官として世襲が許される身分になる因幡国出身の大田垣光古の養女に出され、

松平定信引退1793＝2歳：

その後、丹波亀山藩の藩士の妻となった生母の縁で、

蝦夷地直轄始1799＝8歳：この頃から、丹波国亀岡城に御殿奉公、

伊能測量始・1800＝9歳：

美少女ながら、男勝りのすぎまじい武芸修業をする一方、和歌を学んだ崎人上田秋成から影響を受け、小沢蘆庵にも私淑。

養父の光古には5人の実子がいたが、そのうち4人は夭折、唯一成人まで成長した末子の仙之助もこの間に病没したため、光古は但馬国城崎の庄屋銀右衛門の四男天造を養子に迎え、望古と名乗らせた。

ワッ船狼藉・1807＝16歳：亀山での奉公を終えた頃に_望古と結婚。
_長男、長女、次女を出産するが、いずれも夭折。

間宮海峡発見1809＝18歳：

・・・1815＝24歳：_夫望古が死去して、寡婦となる。

_出家するつもりであったが、養父の涙ながらの願いに、次に何かあったらと約束の上、

水野忠成老中1818＝27歳：

群書類従刊・1819＝28歳：新たに大田垣家の養子となった(旧名重次郎・彦根藩の石川光定の次男)_古肥と再婚。

_一女を出産し、養父も家督を古肥に譲って隠居、

_待望の男児まで授かるが、

シボ外来日・1823＝32歳：_古肥とも死別。仏門に入ることを決め、養父光古と共に剃髪、蓮月と号し、光古は西心と号する。

異国船打払令1825＝34歳：_古肥との間の女兒が死去、

日本外史・・・1827＝36歳：_男児も死去。傷心の養父西心も一気に老けこみ、

和歌は、六人部は香・香川景樹に学び、歌友に村上忠順・橘曙覧・野村望東尼・高島式部・上田ちか子・桜木太夫などがいる。優美繊細でよく人柄を現し万葉の諸作にも比肩され、俳諧もよくし称赞される。

鼠小僧磔・・・1832＝41歳：_養父西心までが死去して孤独になると、生まれ育った知恩院を去って、聖護院村岡崎に移る。

とりあえず生計を立てようと身につけてきたものを振り返り、尼僧の身で教えられるものとしては和歌しかない、その教授をしようと弟子を取ることにしたが、美人ぶりは相変わらずで、男たちがたかってくるようになり、醜くなるように眉を剃ったり、歯を抜いたりしても変わらず、ついに断念。_ひもじい身になって町を歩いていた時、栗田焼を家業とする老婆に出会い、勧められるがままに土を捏ねはじめるや一気にのめり込み、当初は全くダメであったが、やがて悟りの境地に達して作風が変わるとともに、

・・・1836＝45歳：この頃には*評判が出始め、以後、陶芸により生計をたてることになる。

大塩平八郎乱1837＝46歳：

_自作の焼き物に自詠の和歌を釘彫りで施した作品は“蓮月焼”と呼ばれ、京のお土産として人気を博し、贋作まで出回るほどになる一方、客が押し掛けるようになって安んずるが失われたため、以後、住居を転々とし、“屋越し蓮月”と呼ばれるほどの引越し好きとして知られるようになる。

阿部正弘首座1845＝54歳：

聖護院村から鴨川越しに故郷三本木が見えるのに、橋が無かったことから、陶器で収入が得られるようになるとともに、橋をかけることを夢みて貯蓄してきたが、

国定忠治磔・1850＝60歳：京都で飢饉が起こると奉行所にそのまま献金、以後、再び橋の資金を貯蓄し始め、

ペリー来航・1853＝62歳：

開国開港・・・1854＝63歳：

松下村塾・・・1856＝65歳：この年、*のちの富岡鉄斎を侍童とし、心性寺の一室を借りて引っ越し、以後、鉄斎の世話を受けながら、彼の人格形成に大きな影響を与えて行く。

この頃には、_名声が全国に轟くようになり、

桜田門外変・1860＝69歳：

_自らも勤王の志の篤かったことから、梅田雲浜・梁川星巖・井出曙・野村望東尼・税所敦子ら志士らを支援し始め、役所から何度も呼び出されるようになり、

8月18日政変1863＝72歳：この頃、ようやく丸太町橋を実現するとまもなく、*鉄斎も独立し始め、安全も兼ねて、和尚の誘いにのって西賀茂村神光院の茶所を安住の地とし、

短冊に歌を書いても金をとらず、歌集の出版も拒否し続けてきて、鉄斎すら困っていたが、

薩長同盟・・・1866＝75歳：

長州征伐などで米価が高騰すると、短冊や画賛を書き続け、その喜捨でもって粥施行し、

明治維新・・・1868＝77歳：維新に際し、和歌によって西郷隆盛に無血開城の気持ちを起こさせ、高島式部との「二女和歌集」、

初の日刊新聞1870＝79歳：歌集「海人の刈藻」を出版。

学問のすすめ1872＝81歳：

初の民間工場1875＝84歳：*腸チフスに罹り、神光院で、没した。別れを惜しんだ村の住人が総出で弔いをしたという。

翌年、「蓮月歌集」が出された。昭和初年に「蓮月尼全集」3巻が刊行された。

磯田道史「無私の日本人」、インターネットWikipedia、「この人どんな人」、平凡社百科事典、「日本の女性」、